

コロナ対策で進化する 危機対応

感染力の強いオミクロン株が今年に入って急拡大、新規感染者は減少傾向になったものの、新型コロナ対応が落ち着くにはまだ時間がかかりそうだ。飲食業や観光業はもちろん、労働集約型で多くの人々が工場に出入りし、サプライチェーンが重層的に広がる製造業が受けてきた影響も大きい。

2年近くに及ぶ非常時体制の長期化に経済社会は疲弊の色を隠せないが、その間に繰り返してきた試行錯誤は、企業の危機管理にプラスの変化をもたらしてもいる。従業員の健康、事業の継続、風評被害の防止など、多面的な観点から感染対策や労務管理対策、クラスター対策を行ってきたことが、危機対応力の進化につながっているケースは少なくない。

今回はあらゆる対策を従業員と一丸で実践し生産への影響を防いできた自動車部品メーカーと、企業の社会的責任というコロナ前からの一貫したスタンスで感染対策と向き合ってきた医療装置メーカー、製造業2社の取り組みを紹介する。

Case
01

ソミック石川

「公衆衛生と事業活動の両立」試行錯誤を積み重ね
行動履歴と感染リスクが見える化しクラスター抑制

Case
02

サクラファインテックジャパン

風疹流行時から社会的責任のスタンス変わらず
企業目的を達成する手段として入社率10%台をキープ

「公衆衛生と事業活動の両立」試行錯誤を積み重ね 行動履歴と感染リスクを見える化しクラスター抑制

ソミック石川 ● 静岡県浜松市

感染力の強いオミクロン株が猛威を振るう新型コロナウイルス。2月下旬時点、新規感染者は減少傾向になったとはいえ、落ち着くにはまだ時間がかかりそうだ。労働集約型で多くの人々が工場に出入りする製造業への影響も大きい。この「オミクロン禍」にあっても生産への影響を防いでいる企業がある。自動車部品「ボールジョイント」の製造で国内トップシェアを誇るソミック石川（静岡県浜松市、石川雅洋社長）だ。同社の取り組み取材した。

記事中の写真・資料提供：ソミック石川



消毒訓練で防護服の装着

POINT

① 行動履歴の見える化で徹底した濃厚接触者管理

- ・従業員の行動履歴を見える化し、会社が自ら濃厚接触者を特定。先手の対策につなげて感染拡大を防止する

② 感染リスクの見える化で予防行動の徹底を促す

- ・密集度や密接度、室内の換気量などによって感染リスクを見える化。従業員の主体的な予防行動を促す

③ あらゆる手法・機会での注意喚起

- ・独自のグッズ、ポスター、定期開催のワークショップなど、あらゆる手法・機会を通じて注意喚起。感染対策の重要性を従業員に伝える

自動車部品のボールジョイントとはハンドルとタイヤをつなげる部品で、ハンドルの操作性と走行の安定性を左右する。ソミック石川は静岡県浜松市と磐田市に6カ所、アメリカ、フランスなど海外6カ国に10カ所の工場を構え、約1800人の従業員が働く。

同社ではオミクロン株により1月半ばから感染者が発生し、第6波だけで国内37人を数えた(2月21日現在)。それでも、これまでの感染対策が功を奏し、社内での感染拡大は認められていないという。

同社安全管理部部長の大石淳氏は「第6波はお子さんから感染する家庭内感染が多く、残念だがこれはどうにもならない。しかし会社でのクラスター発生を抑えることで生産への影響を防いでい

る。コロナ対策は事業継続の一貫。公衆衛生と事業活動の両立を目指してきた」と話す。

行動履歴の記入で濃厚接触者管理

生産の停止を避けるための感染拡大防止には「スピーディな濃厚接触者の特定と隔離、そして消毒が重要」と大石氏は語る。これらに大きく貢献するのが行動履歴だ。ソミック石川では2020年4月から現在まで、従業員が毎日の行動履歴の記入を続けている。感染が確定してから接触者を調べはじめては対応が遅れるからだ。

行動履歴をもとに、濃厚接触者を自社で調査。ひっ迫しやすい保健所の調査を待っている、感染が拡大するかもしれない業務復旧も遅くなる。間接部門の従業員は自分のデスク、会議室、更衣室、食堂の着席番号、トイレなど使用した場所を利用時間ごとに記入。この段階で、もし感染したときに濃厚接触者に該当する人名も記載する。

製造ラインに持ち場があり、トイレや休憩を含め移動場所が限定されている工場勤務者は、移動ルートパターン化した行動マップを使って記入作業を簡略化。パターン以外の業務のみ履歴として記載することで負担を減らした。

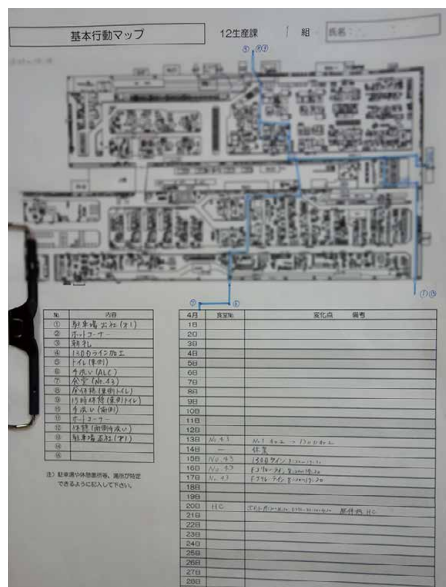
大石氏は「詳しく調べると、感染者との接点がないと判明するケースもありました。行動履歴による安全性と安心感とを従業員が体感できているため、現在まで不満もなく続いています」と続ける。



安全管理部部長 大石淳氏



安全管理部安全管理室主査 浅野光伸氏



工場勤務者の移動ルートをパターン化した「基本行動マップ」

早急な業務復旧のための消毒作業も、行動履歴をもとに従業員が手分けして実施する。

「消毒業者へ依頼しても時間がかかり、再開が遅れる。従業員ならすぐ対応できます。当社は感染が疑われたPCR検査の段階で同日に消毒、翌日では遅い。とはいえ消毒作業は初めてで、保健所と相談しながら20回を超える消毒訓練を実施。効率的で確実なマニュアルを策定し、改定を重ねました。リスクの特に高いトイレ消毒は防護服を着用しますが、この着脱が最も感染リスクが高い。専門家の指導を受けながら進めました」

●従業員の
行動履歴
記入シート

<行動履歴2週間分 休日含む>

部署： _____ 氏名： _____

上司確認

濃厚接触者：半径1メートル以内の会話できる距離に概ね15分以上いた者の名前

月日	XX月 XX日(日)	XX月 XX日(月)	XX月 XX日(火)	XX月 XX日(水)	XX月 XX日(木)	XX月 XX日(金)	XX月 XX日(土)							
○体温														
○症状	のどの痛み・咳・倦怠感・ 寒気・関節痛・筋肉痛・ その他 ()	のどの痛み・咳・倦怠感・ 寒気・関節痛・筋肉痛・ その他 ()	のどの痛み・咳・倦怠感・ 寒気・関節痛・筋肉痛・ その他 ()	のどの痛み・咳・倦怠感・ 寒気・関節痛・筋肉痛・ その他 ()	のどの痛み・咳・倦怠感・ 寒気・関節痛・筋肉痛・ その他 ()	のどの痛み・咳・倦怠感・ 寒気・関節痛・筋肉痛・ その他 ()	のどの痛み・咳・倦怠感・ 寒気・関節痛・筋肉痛・ その他 ()							
○マスク着用	有・無	有・無	有・無	有・無	有・無	有・無	有・無							
○更衣室利用	有・無	有・無	有・無	有・無	有・無	有・無	有・無							
使用場所：														
○食堂利用	有・無	有・無	有・無	有・無	有・無	有・無	有・無							
着席場所：														
○トイレ場所														
	場所	濃厚接触者	場所	濃厚接触者	場所	濃厚接触者	場所	濃厚接触者	場所	濃厚接触者	場所	濃厚接触者	場所	濃厚接触者
8:00- 9:00														
9:00-10:00														
10:00-11:00														
11:00-12:00														
12:00-13:00														
13:00-14:00														
14:00-15:00														
15:00-16:00														
16:00-17:00														
17:00-18:00														
18:00-19:00														
19:00-20:00														

月日	XX月 XX日(日)	XX月 XX日(月)	XX月 XX日(火)	XX月 XX日(水)	XX月 XX日(木)	XX月 XX日(金)	XX月 XX日(土)							
○体温														
○症状	のどの痛み・咳・倦怠感・ 寒気・関節痛・筋肉痛・ その他 ()	のどの痛み・咳・倦怠感・ 寒気・関節痛・筋肉痛・ その他 ()	のどの痛み・咳・倦怠感・ 寒気・関節痛・筋肉痛・ その他 ()	のどの痛み・咳・倦怠感・ 寒気・関節痛・筋肉痛・ その他 ()	のどの痛み・咳・倦怠感・ 寒気・関節痛・筋肉痛・ その他 ()	のどの痛み・咳・倦怠感・ 寒気・関節痛・筋肉痛・ その他 ()	のどの痛み・咳・倦怠感・ 寒気・関節痛・筋肉痛・ その他 ()							
○マスク着用	有・無	有・無	有・無	有・無	有・無	有・無	有・無							
○更衣室利用	有・無	有・無	有・無	有・無	有・無	有・無	有・無							
使用場所：														
○食堂利用	有・無	有・無	有・無	有・無	有・無	有・無	有・無							
着席場所：														
○トイレ場所														
	場所	濃厚接触者	場所	濃厚接触者	場所	濃厚接触者	場所	濃厚接触者	場所	濃厚接触者	場所	濃厚接触者	場所	濃厚接触者
8:00- 9:00														
9:00-10:00														
10:00-11:00														
11:00-12:00														
12:00-13:00														
13:00-14:00														
14:00-15:00														
15:00-16:00														
16:00-17:00														
17:00-18:00														
18:00-19:00														
19:00-20:00														

・業務上で行動ガイドラインの自粛対象地域に出張した後は、必要に応じて抗原検査キットにて確認。

感染が疑われる人を少しでも早くスクリーニングするため、第5波が広がっている2021年夏に大量に導入したのが抗原検査だ。PCRは高価で導入が難しかったが、抗原検査の簡易検査キットは手が届いた。唾液を使い7～8分で結果が出るタイプを選択。「濃厚接触を疑われた人たちだけではなく、出張者などに積極的に使った。第6波が始まった年末年始には非常に役立った」と大石氏は話す。

感染者が増大し、病院でのPCR検査まで時間がかかる現在、感染の不安を感じた場合は静岡県¹の無料PCR検査（3月末まで）を推奨している。

組織的な対策の積み重ね

濃厚接触者の特定や消毒が素早く行われているとはいえ、感染者が短期に多数発生しては生産への影響は免れない。現在の取り組みのベースには2020年4月からの組織的対策の積み重ねがある。

日本で初の感染者が発生する以前より手探りで対策を進めていた同社は、2020年4月1日に新型コロナウイルス感染症対策本部を設置。浜松市役所や浜松市保健所、外部有識者と積極的に情報交換を行った。

当初は本部長を務める現副社長を含めた取締役と、生産や総務、財務、海外事業など各部門のトップ、そして事務局長を務める大石氏らが参加。2021年からはより早い意思決定のため、事務局以外は副社長、生産担当役員、総務部長にメンバー



トイレの消毒訓練



工場の消毒訓練



消毒訓練で防護服の脱衣



防護服の着脱動画も作成

を絞るようになった。

また、各部門長と工場長、グループ会社の代表が参加する新型コロナウイルス感染症対策連絡会が、感染者数のトレンドや新たな取り組み、注意喚起事項などの重要な情報をグループ全体に広げる目的で設置された。本部会議は毎週水曜日に、連絡会は毎週木曜日に開催され現在まで続いている。

感染リスクを「見える化」し予防行動

従業員が自ら3密を避けるよう、当初から力を入

れていた取り組みが感染リスクの「見える化」だ。

「人事や設計などの間接部門は業務効率化のため、ワンフロアに400人ほどが集まるレイアウトだった。それが新型コロナで裏目に出た。基本的なレイアウトは変えられないので、3密を防ぐ注意喚起が急務になりました」と大石氏は振り返る。

リスクの高い場所を示した「3密可視化マップ」を社内全フロアで作成。会議室など8人以上の人が集まる場所を「密集」として赤色で、ソーシャルディスタンスが取れない場所を「密接」として黄色、窓がなく閉じた空間を「密閉」として青色で示した

(後に会議室は7人以下で利用のルールがつけられた)。月に1度開催する安全衛生会議では、3密可視化マップのリスクの高い場所に注意喚起表示があるかなどを、パトロールによってチェックして回った。

空気の流れも「見える化」した。エアコン、扇風機、吸気口、換気口のような空調設備を色分けしてフロア図中に示す「換気見える化マップ」を作成。風量を計測し、基準とした1人あたりの必要換気量30m³/hを満たすフロア人数もはじき出した。

「全席にアクリル板を設置すると、空気の流れが悪くなった。安全な空間を維持できるように換気能力を上げる中、空調の能力も調べました。とにかく、できることは何でも試した」と大石氏は話す。

デスクでの隣り合わせを避けるため、出勤リモートワークなのかを座席レイアウトの中に表示できる「密集度見える化マップ」も構築し、運用している。レイアウトを見ながら、隣接しない席での業務を選択できる。従業員を社内リモートで分散させる対策を進めながらの取り組みだった。

感染リスクの高い場所を示す「3密可視化マップ」



あらゆる対策を試行錯誤

飛沫感染の危険性が高い食堂では、座席を減らしてテーブルの間隔を広げ、仕切り板を設置。黙食を勧めるポスターも貼った。昼の休憩時間は時差式を導入。同じく飛沫感染対策として、喫煙所では人数制限とソーシャルディスタンスを足元のマークで明示した。工場の休憩室にあったソファは、一部を、座れないようにダンボールで覆った。

自作したグッズは、足踏み式の消毒スタンドや検温器スタンド、飛沫感染防止のアクリルパネルなど、枚挙にいとまがない。理化学研究所の実験によりスーパーコンピューター「富岳」のシミュレーションで湿度が高ければウイルスの拡散が抑えられるとわかったと、大型加湿器も導入。バス通勤者のために専用の通勤バスも運行した。

リモートワーク用のウェブ会議やチャット、ファイル共有システムはマイクロソフト社のTeamsを活用。働き方改革で利用を進めていたが、一気に使用が拡大した。工場はリモートに変えられない業務がほとんどのため、間接部門で利用していった。当初は5%ほどのリモート率だったが、現在は在宅勤務を合わせて40%にまで高まっているという。

現場の状況をふまえ、対応を変えたところもある。夏、換気のために窓を開けると室内温度が上がる工場では、熱中症予防に1人作業の生産ラインでマスク（透明なマウスガード）の着用を許可した。ただし、打ち合わせや会議ではマスクを着用する。



自作の足踏み式消毒スタンド



自作の非接触トイレドア



食堂の黙食ポスター

定期的なワークショップで繰り返し伝える

感染リスクを下げる行動に従業員に促すため、ワークショップも開催してきた。2020年後半から全従業員を対象に、オンライン参加も含め10人ほどの少人数で開催し、これまでに6回を数える。

社会の動きに合わせてテーマを工夫することでマンネリ化を防ぎつつ、重要な対策を繰り返し伝え、正確な情報を伝える。後遺症や自宅療養もテーマとして取り上げた。

安全管理部安全管理室主査の浅野光伸氏は「感染対策の重要性を自分事としてとらえる内容にしている。第6弾のテーマはデルタ株でした。4コマイラストで特徴をわかりやすく説明した後で、家族に伝える方法を考えて書いてもらいました。どんな質問をしたら気軽に答えてもらえるか、年配の従業員にも伝わるよう工夫している」と話す。



グループ会社も参加するオンラインワークショップ。このときのテーマは「自宅療養に備える」



注意喚起を促すポスター。ワークショップとあわせてテーマを変えている

新型コロナウイルスの注意喚起に掲示しているポスターも、ワークショップと連動してテーマを変えている。理解しやすいデザインを採用し、掲示版だけでなく、食堂やトイレといった立ち止まる場所に重点的に貼るなど、少しでも目に入るように取り組んでいる。

コロナ禍でも防災訓練を継続実施

ソミック石川が地震対策のBCPを策定したのは東日本大震災後の2012年。2019年には前年の台風24号による大規模停電の被害を受けて台風対策のBCPを、そして新型コロナウイルスの流行を受けて2021年に感染症対策のBCPを整備した。コロナ禍であっても、年1度の総合防災訓練と6回の避難訓練を継続して実施している。

浅野氏は「南海トラフ巨大地震の被害想定区域

や台風・大雨で氾濫する可能性のある天竜川流域にも工場があります。これらの災害を想定した野外や高所への避難訓練は欠かせません。会話の制限やソーシャルディスタンスを保ちながら実施しています。ただし、オミクロン株の流行があり、2月中旬に予定していた避難訓練は3月に延期した」と話す。

各工場には、災害時、感染者を隔離するテントとベッドも準備した。大石氏は「コロナ禍とはいえ、複合災害も想定し、油断なく、抜かりなく対策を進めています」と語る。

ソミック石川

1916年、静岡県浜松市で「石川鐵工場」として創業し、織機用ボルト・ナットの製造を開始。その後、自動車部品の製造に軸足を移す。主力商品のボールジョイントは軽自動車から高級車、トラックなど車両の特性をあわせて開発・製造し、国内シェアトップを誇る。積極的なグローバル展開で海外6カ国に10カ所の工場を構える。